
牢屋と僕。

蓮希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牢屋と僕。

【Nコード】

N3636E

【作者名】

蓮希

【あらすじ】

牢屋の見張りが仕事な僕と捕まったさまざまな罪人と過ごす毎日

プロローグ

僕はこの国の牢屋の見張りを任されている一人だ。

個人プロフィールをいうと……え？誰も聞いていないって？せっかくだから聞いて行きなよ。

牢屋に居る僕ばプロフィール聞ける人なんて数少ないんだから。

ユウト 歳は此間21の誕生日の日を迎えた。

よろしくね？…え、短すぎるって？わがままだなあ。

今日は僕の毎日のうちの一部を教えようと思う。

「罪人さーん？名もなき罪人Eさん？」

「誰が名もなきよ！？あたしにはシエルっていう可愛い名前があるのよ！」

「御免御免。万引きさん？100万ジェリーもするメダル盗もうとしたのは何処の誰だい？」

ジェリーというのはこの国のお金の単位だ。序に言うとお金は細長い宝石みたいなキラキラしたもの。赤いのは100ジェリー。桃色のは50ジェリー…序に一番下は1ジェリーで白だ。

大きく分けると上から 黒 青 緑 赤（桃） 白 になる。

…って何で僕お金のこと詳しく話しているんだろ？

「…そういわれると何もいえないわ。取り合えず飯頂戴！？」

「たまには抜きで良いようですー！シェフ」

「了解です」

「うわああああ！！？何でこんなところにシェフが居るのよ！？」
鉄格子の中で叫ぶ万引きさんにクスクスツと笑う。

「あーあつ薄っぺらくなったら此処をとりぬけられるのに」
こんなフアンタジー見たいな思考を持っているのがシエルの面白いところ。

そしてそれを弄るのが僕の仕事（じゃないけど。本来は見張りなんだけど。）

「なんならハンマーでっ」

「嘘ー！！」

「いやいや、うそつきは泥棒の始まりだよ？これ以上何か盗んだらそれこそ死刑だよ？良いの？それで良いの？後二年で終わる牢獄人生が三百年になっても良いの？あー、いいんだ。そうなんだ」

「ごごごごつ、御免なさいー！！！！てか三百年も生きられないよー！！」

そう言つて鉄格子越しに涙目になるシエル。それを見て笑う。

「冗談。ちゃんとシェフも作ってるよ」

その言葉に笑つたシエルを見てホツと息を吐いた。

罪人にシェフかよと思つた人も居るだろうが、実は僕も思つた事も一度あつた。

『罪人だろうが飯ぐらい一般人と同じものを食べさせる』

というのが陛下の命令。何故かと聞いたら勿論 牢屋で死んだら生臭くなるからだそうだ。

相変わらず陛下らしいというか…… 19歳で陛下となったあの人はこの国で一番若かつたらしいが今は26歳だ。あれから七年もたったのかぁ……

七年前もこんなだった。出世してないのか僕……
序に七年前は14だ。若いだろう？その時から僕は監視副長という地位についていたんだ。

「ユウト監視長！！ウェラスが暴れています！」

「アイツ？ほつとけ。そのうち腹が減りすぎて倒れる」

「わかってんなら早く飯をよこせー！！！！！！！！」

遠くから聞こえてきた絶叫は罪人Fのウェラスだ。

つかまっている理由は食品泥棒。遠くの小さな村からやってきた奴だ。

腹が減ると暴れだす困った囚人だ。

「落ち着けよ、馬鹿」

「馬鹿言っんじゃねえー……あーっ、腹減った。」

「僕が居るとおとなしいんだ。」

「お前に俺の絶叫はつうじねえ。どうせ今も耳栓してるんだろ？あー、読唇術って良いな。俺も使いてー」

「黙れ」

牢屋A……つまりこの場所の監視長である僕は、この二人を監視している。

もう此処には二人しかいない。

殺されたり罪が許されたり……色々あったのだ。

その話を、これから暇な時間を作って聞いてもらおうかなと思ってる。

というより毎日暇なんだけどね。僕と罪人Aから罪人Fの楽しき毎日をご紹介しますと思った。

罪人Aと僕。

「監視副長！アースが夕食をとり終わったようです！」
ビシッと敬礼を取る部下の一人にああと微笑みを作った。

この時点でこの牢屋には一人しか居なかったのだ。

僕が様子を見に行くと彼は驚きで眼を見開いて、今度は眼を細めた。

「ユウト。」

「平気かな？アース君は」

「フンッ、俺がそう簡単にくたばるか阿呆」

そっぴいながら微笑んでいるアースに笑みを引きつらせる。ように見せた。

「飛んで蜂見る冬のアース」

「…へ？」

呆けた表情のアースはポリポリッと頬をかいた。分からないというように…ってわかったら凄いのよ。

僕は右手に持っている鍵を振り回しながら

「実はこの牢屋猛毒蜂が居るの知ってる？」

「……………うぎゃあああああああああつ！！！？こっ殺す気か！？」

「誰も言っていないけど…………死にたいなら」

「すまなかったああああああ！」

アースは大量殺人犯として捕まっていた。何時も無表情に見えるが僕が来ると表情を和らげる事が多い。彼が言うに安心できるんだと…最初ボーイズラブは僕受け付けないよ？といったときは僕まで殺されそうになったことだ。

いや……一応牢屋の監視副長という地位に就いているから剣も弓もある程度の武器なら扱えるんだが。
序に一度アースの罪を監視長に聞いたことがあったがフルフルツと首を振られて分からないといわれた。

「ふうっ…そのうち僕と君どっちが強いかはつきりさせようじゃないか。」

その言葉に勿論だっ！と声をあげたアースを見て僕は笑った。

落とした。

何をつて、アースの食事を。アースが眼を見開いて涙眼で見つめてきた。

腹が減っても二日は死なぬ。有名な言葉じゃないか。なのになんでそんな眼で僕を見つめるんだい？アース。

「それは腹が減ったら戦はできぬだろうが！！？」

何で僕の心読んでの？アース。君読心術使えたんだ凄いな。

「口に出しているだろうが！！……ああ…俺の晩飯」

このままだとのの字を書いてしまいそうな勢いのアースにぶつと僕は笑う。

きつと睨まれた。

「笑い事じゃない！」

そんな事を話していると後ろから声が聞こえてきた。

「元気そうだね。アース、私のユウトオオ！！」

そう言って抱きついてきたのは僕の上司である監視長 エミさんだ。

というより何時から僕は貴方のものになっただんですか？ふふふつとエミさんは笑って何処かの劇団と間違われそうな演技を始めた。

「ああ、今日も麗しいね。私のシエール」

「待て！？ユウト何処いきやがったエミ！！」

「まあ昆布様。また来てくださったの？こんなわたくしのために」

「昆布は美味だ……って昆布様って何だー！！？てかお前の裏声すげえな！！」

とうとうノリツツコミまで始めたアース。うん、楽しい。

「フフフツ、愛しき君のためならば火の中だつて！水の中！アノ子のスカートの中だつて……」

「ふふふつ、それは犯罪でつかまってしまいますわ昆布様」

「はははっその通りだね。シエール。我が君」

「大好きですわ。昆布様……」

「そして二人は結ばれる。三日後の満月の夜に……しかし、この幸せはそう長くないことに二人は気付いていなかった……」

「オイイイイ！！！！」

もう突っ込む言葉さえないようだ。絶叫をあげてからクタリツと鉄格子越しに座り込むアースが見えた。

そんなんで僕たちの愛という名のコントを終える筈が無いじゃないか。

「『我が愛しき君にプロポーズをしようと思つたら金がなくて指輪がなかった。』……シエールと昆布の愛……そして、結ばれてから二回目の満月の夜。なんとシエールは……っ！次回！200813455話！」

僕に続きエミさんが言う。

「『シエール？誰だいその方は……浮気だと！！？お父さんは……じやなかった私は許さんぞ！？そんな何処の馬の骨かも分からぬ奴に私の妻をやるわけには……っ！』『御免なさい昆布様。私は勿論貴方を愛しておりました。それでも今は……っ！』『俺がシエールを足……じゃない。愛しているんだー！！』でお送りさせていただきます。」

それではまた一年後のこの時間にお会いしましょう」
はいはい」と手を振っている僕らに再び突っ込みの雨

「話が多いし一年に一話だったら何百年かかるんだこの話っ！てか
今大体内容話しちまつてるじゃねえか！！！」

「上手い！座布団四枚あげる！」

拍手しながら何処からか取り出した座布団をほいっと鉄格子前に置く
「いらねえ！」

「ええ？いらんのかい？実はこの中には美味しい美味しい晩御飯
のおかずが数品……」

「いる！」

「入ってるわけ無いだろう」

僕とエミさんのコントで力尽きたアースに流石に可愛いそうだと追加のご飯を持ってくる僕は優しいだろう？アース。

こんな感じで牢屋とは思えぬ明るき日常を僕とエミさん、そしてアースとすごしていた。

罪人Bと僕。

「……リクリア。年齢不詳……ねえ。」

ゆらりつと私室の椅子の上でゆれるエミさん。

僕はその横で本を読んでいた。……アースの見張りは、僕たちの部下 ユキに任せておいた。

僕たちが見張るのは牢屋A。この城の端にある大きな牢屋。そしてその真逆にある牢屋はそのまんま牢屋B。僕が入る前に牢屋Aの者は隣国に移されたりと色々されたので牢屋Bの方が人数的に多い。そのため、今は僕とエミさん ユキの三人しか見張りが居なかった。僕は何かを呟いたエミさんの手からそつと書類を抜き取りその書類を上から下までざつと眺めた。エミさんが何も言わない限り眼を通しておけということなのだろう。

この書類には僕たちが見張っている牢屋に新しく来た罪人のことが書かれていた。

名前 リクリア

年齢 不詳

性別 女

『隣国の王子を殺害した為この国のアストラルに連れて来られた。この者の出身地は……』

詳しい事が書かれているけれどこの書類の半分以上の文字は無駄だと思われる。

隣の王子を殺した為。だけで良いじゃないか。こんな面倒くさい文章書かなくても十分だと思われるが？

そんな事を考えている僕の耳にエミさんの声が届いた。

「殺した……ねえ。多分あの子、剣の使い方下手だよ」

一瞬でそれを見抜く貴方は何ですかとか思わず突っ込みたくなった。

エミさんの目は確かだ。一目見ただけで戦闘ができるとかできないとか見抜けるのだ。
本当に僕凄い人を上司に持っているよね。

「ぼくのモルモット（実験台）　それさえあれば牢獄もたのしいのにな」

……………

「ねえエミさん。本当に剣駄目なんですか？」

「あれはメスとか実験用具は使いこなせるタイプだよ。うん。多分。怖いよ。」

エミさん……罪人Bが怖いです。助けてください。…いや駄目だ！
！此処でギャグ体質の僕が逃げてどうするんだ！

「リクリア。」

僕が彼女を呼ぶと、僕と同じ年ぐらいの外見を持つ少女はニコリと微笑んだ。

「あつ、僕のモルモット。」

そう言つて、何処からかメスを取り出した彼女はヒュンツと牢屋の鉄格子を切り裂いた。

「どええええええっ！！？」

向かい側に居たアースが大声を出す。うん、僕も珍しく叫びたい気分なんだ。

メスが自分の目の前に来たのを見てしゃがんで少女に足払いをかけた。…がくるりと回転して僕に向き直った。

「滅茶苦茶強いんですが。エミさん」

「そつだ、眼科行こう」

そう言つて本気で行っちゃいそうなエミさんを横目で見つめてひゅ

んつと移動してアースの鉄格子に手をかけた。

「取引しようか、リクリア」

その言葉にピタリッと動きを止めて首をかしげて僕を見てくるリクリア。可愛いものにな、この姿は。

「取引？なあに？」

そいうリクリアに僕も微笑んだ。

「君が、死ぬことが決定しても生きることが決定しても……この牢屋から出られるときに此処に居るアース君を解剖する権利を与えよう！」

「俺を巻き込むなよ！？大体それで相手が納得するわ……」

「有難う！！じゃ、これから僕のために死なないでね？アース」

「納得したあああ！！？」

恋人にいうような台詞を吐いたリクリアにアースは涙眼だった。

こうして人いわくマッドサイエンティストとでもいうのかそんな少女（？）

リクリアが新たにこの牢屋に来た。恐怖の毎日が始まるかもしれない……（多分アースの）

僕の日（前書き）

前回の更新からだいぶ遅くなりました……

僕の日

AM*4:29:24 起床

『ピコンピコン…ピコ…ピコン…ピコン…ピコン…ピコン…』

「誰か死んだ？」

そう言つてむくつと起きる僕。目覚ましを止めてベットから降りた。軽く首を動かすとコキコキゴキゴキゴキと音がする……筈が無い。そんな音がしたら目覚ましじゃなくて僕が死んでる。

僕が住んでいるのは城の隣にある…まあ寮みたいなものだと思つてくれれば良い。一応城とは繋がつていて行き来が楽なのだ。この国に家が無い城関係の者はここに住み家があるものはちゃんと帰る。僕の家はこの国と仲の良い隣国にある。

見張りよしの制服を身に纏うとドアが蹴り破られた。

「よう」

そう言つて入ってきたのは仮にもこの国の 陛下 である人物。名をウエレスト。一応僕の親友かもしれない。

「かもつて何だ。俺達は立派な親友……だろ……？」

「何その自信なさげな言葉。窓から落とすよ」

「何でだよ。てか仮にも陛下を落とすな。」

「煩い黙れ。」

「てかお前俺が年上つて忘れていないか？」

いや、一応覚えてるけれども。

早起きする僕が一番最初に出会う人物 陛下

AM*7:42 朝食

「私の可愛いユウトー!!」

「煩いです。黙ってくださいエミさん。」

そう言いながらもくもくと朝食を食べる。よつこらしよつと僕の向かい側に座るエミさん。

この城での食事は大抵各部署で食べる。ということで牢屋Aの人物、僕、エミさん、ユキの三人で何時も朝食をとる。序に昼食は僕たち全員で決め牢屋の…前までアースだけだったが、牢屋の皆と食べることにしている。夕食は家がこの国にあるものは帰る。それだけ。

「にしても本当にエミ監視長はユウト副監視長が好きですね。」

「失礼な。ユキも愛しているよ。」

「有難うございます。でも私はそんな安っぽい愛いきりません」

ニツコリと笑って言うユキにエミさんは傷ついた表情をする。

何時もニコニコ笑い、何でもすぱつと切り捨てる。笑みの後ろには何が隠れているか分からない、それでもほのぼの出来て僕の大好きな女部下。それがユキ。

AM*8:00 見張り開始

「お早う。リクリアにリクリアの生贄兼罪人A君。」

「何でコイツは名前で俺はそんな扱いなんだよ!!!?」

僕の言葉にツツコミを入れる罪人A…もとい、アース。この男はリクリアの生贄である。

無論、僕がモルモット（実験台）になることを恐れた為……ではないのだ。うん。そういいきつておこう。

「あつ、ユウ君だ」

僕を指差すリクリア。見た目的に癒し系な少女。だが喋りだすとマツドサイエンティストという怖い少女である。

「お早うリクリア。弄るなら僕でもなくユキでもなくアースかエミさんにしてね?」

「大丈夫。ユウ君とユキは弄らないよ。僕が興味あるモルモットは……アースだけだし。でもエミって人も面白いよなあ………」

「何故私を巻き込むような発言をするんだああユウトオオ!!」
「僕が巻き込まれたくないからです」

ニヤリツと嫌な笑みを作るリクリアと頭を抱えるエミさん。僕はニコニコ笑う。

「……………俺、忘れられてる」

牢屋の隅っこで膝を抱えているアースは見えないよ。僕。

A M * 1 1 : 3 0 昼食

「ちよつと、アース。いや、僕のモルモット」

「何で言い直すんだよ!!?」

「それ美味かったから僕に頂戴。さもないと今すぐ実験するよ?」
(ニパアツ)」

「あげるあげるあげるあげる!!から止めてくれええ!!」

そんな二人の会話をBGMに僕とエミさんとユキは昼食を取る。
てか君達……向かいだからといってどうやっておかず貰うんだよ。

P M * 2 : 5 0 書類整理

「ユキ。これ全部捨てといてくれるかい?愛しいユウト。これ面倒くさいから全部やっつけ」

「何で僕に命令!?てか、貴方がやらないと意味がありません監視長ー!!!」

ばっさばっさと書類を切り捨てる僕等。

大体牢屋の見張りなのになんでこんなに書類が多いかというと……
全て陛下が回してきたものだったりする。

『牢屋Bは大変だし他のところも何かと忙しいんでな』

その陛下の一言でこの広い城の四分の一近くがこの牢屋Aに来てたりする。まあ元々犯罪など問題らしい問題は余り無いのでこの城が楽なのは確かだったりする。

「頑張れよー」

遠くから聞こえるアースの声。滅茶苦茶ムカつく。元々この牢屋の見張りが仕事の主なので本当は余り関係なかった書類整理はこの牢屋の入り口付近にあるテーブルで行っている。

これなら牢屋の奴等がちゃんと分かるから良いのだ。

「頑張つてよー！終わったら僕のモルモット弄って良いから」

その言葉に僕とエミさんのやる気は微かに上がった。

そして今日も陛下の一言のせいで書類整理を頑張ることになる。

P M * 6 : 5 0 見張り終了

「明日なー」

「バイバイ」

そういう牢屋の二人に手を振って僕たちは牢屋を出る。

「にしても二人になったからアースも寂しくなくなったんじゃないでしょうか」

ユキの其の言葉に笑う僕とエミさん。

確かにその通りだと思う。アースも言わないだけで絶対寂しいだろう。

「こんなこと言うと酷いけどさ、良かったよね」

「そうだろう？牢屋Bだけじゃ酷いからね。今度Bから貰ってこようか」

「どうせなら面白い人が良いよね。ユキ」

「そうですね。騒がしい職場の方が私は好きです」

その二日後……また新たに牢屋Aに罪人が一人増えることはまだ三

人は知らなかった。

罪人Cと僕。

ドタタタタタタタタツと牢屋に足音が響く。

書類整理をしていた僕と眼鏡をかけたユキは顔を上げた。

「ユキッ！ユウトー！！！！牢屋Bから罪人貰ってきたぞ！！」

「本当ですか！！？」

またしても新人。それは喜ぶべきじゃないのだろうか何か感激した。ユキは下がってきた眼鏡をクイツと上げて微笑んだ。

「また、この牢屋がにぎやかになりそうですね。」

その言葉に僕たちは微笑を作った。

そしたら、扉が開いた。

「……………今日は…………」

そう言って入ってきたのは桃色の髪をした12になるかならないか。何でこんな子が？って思うこともあるかもしれない。が、僕たちは違った。

「可愛い！！可愛すぎるぞ！！」

そう言っつて、その子を抱きしめるエミさん。僕はずるいつと言いなから頭を撫でる。

子供が余り好きではないユキも頬を緩めてその子を見ていた。

兎に角、可愛すぎるのだ。

「……………抱きつか、無いでください……………呪いますよ？」

だからその子の言葉に僕たちは固まるしか出来なかった。

やはり罪人として捕まるのだから、まともな人物を期待しちゃ駄目だね。

「アーティ、昼食」

「慣れなれ、しく……………名前を呼ばないでください」

そう言ったアーティにうつん……………と僕は唸る。序にユキもエミさん

も先に昼食をとっている。アーティは騒がしいのが嫌いだからと一番すみの牢屋を選んだのだ。

「そついわれてもね。名前呼ばないと、罪人Cになるよ?」

「呪います」

「僕の特技呪い返しなんだ。」

それは実は確かだったりする。何か小さな頃から色々興味持ったものは調べまくったりしてたし……

それを聞いてアーティはパツと顔を明るくさせた。…やばい、可愛い。

「本当、ですか?……毒薬とか、詳しいですか?」

「え、あー……うん。」

「なら………いいえ、止めておきます」

更に顔を明るくさせたアーティはハツと我に返ったのか俯いた。

この子……

「牢屋だからって、暗くなることないよ?」

「………え?」

「君が何で捕まったかなんて僕は知らないけどさ、どうせなら楽しんだら?」

「………できま、せん………だって………」

ふうつと溜息を吐いた。

「両親を毒殺しちゃったから?」

「………」

「何でか、聞いて良いかな?」

僕が言うとアーティは少し悩んでから………はいと、答えた。

僕はニコツと笑う。

「………私の、…未来は決まって………たのです。」

「決まって?」

「はい………両親に、全て………将来も何もかも決められていて

………私の、村ではそれが普通で………」

僕は牢屋の扉を開き、中にヒョイツと座った。そして辛そうに話す

アーティの頭を撫でる

そうすると、彼女は小さな微笑みを作った。

「……………両親に愛されなかったわけじゃない……んです。」

そう言ったアーティをキュッと抱きしめた。

アーティの肩は震えていて僕は言葉を紡ぐ。

「ねえ、何で僕が牢屋の見張りなんて仕事についたとおもっ？」

そう言った僕にアーティの泣き声は一度、止まった。

僕はそのまま言う。

「陛下と知り合いだったから……っていうのもあるんだけど……牢屋の中でも、楽しい人生を歩める人が居て欲しい。僕が、此処で笑いを作れるなら……何か、楽しいと思える事があるなら……僕は、嬉しいんだよ。」

「……………ゆ、ユウト……さんのお陰で、楽しそうです……」
ブイツと顔を逸らすアーティ。

ツンデレかつ……これぞツンデレなのかつ……!?

凄く可愛い……抱きしめて良いかな？良いよね？もう一度ぐらい……

「かわいいなあ」

アーティはキッと睨みつけて僕を牢屋から追い出す。

ひどいなあ……

「ほら、昼食一緒に食べない？」

「……………食べる」

僕はニコッと微笑を作る。

「……………ユウ君が来ない……グスンッ」

「お前実はユウト馬鹿だよな？」

「煩いよ僕のモルモット。」

随分とリクリアに気に入られていたユウトは此処に居なく、思い切りエミも溜息を吐く。

そして、ユウトとアーティを除く場に、扉を叩く音が聞こえた。

「誰だー？」

我が家から言うようにエミが言っていると俺俺…という声が聞こえた。

「俺俺詐欺ならおとなしく牢屋に入ってくれ」

「絶対分かってるだろー！！！！？エミ！！！」

そう言っただけを蹴破ってきたのは……この国の陛下。ウエレスト。

ニイツと笑ったウエレストはん？と辺りを見渡す。

「ユウトいないか？ユウト」

「アーティと一緒に居る」

「チッ……アイツに話があつたんだがな……」

「何かあつたのか？」

「ユウト」レディアスをこの城から追放する」

罪人と僕。(後書き)

早くも最終回!!?.....んなわけないのです。

陛下と僕。(前書き)

69日も更新しなかった！(他の小説もだ！)

陛下と僕。

「ユウト!! レディアスをこの城から追放する」

その声はまあ聞こえていたが僕はまったく慌てていなかった。うん。そういえばそんな日か。

何か妙に慌ててる声が聞こえてきた。僕も行こうと立ち上がるとキョツと服の裾をアーティに掴まれた。

ん? と振り返って微笑めば、不安そうな顔でああさっきの陛下の言葉かと妙に納得できた。

「……いけないで、下さい」

「……大丈夫だよ、アーティ。あの屑な陛下は人を驚かすのがだーいすきなんだ」

片手でピースすれば安心した顔でコクリツと頷いてその手を離してくれた。

さ・て・と!

あのお遊びが過ぎる陛下を一回殴ってこなくちゃね。

「どしたのー?」

「ユウト!! お前がこの城を追放されると……っ!!」

「……陛下、前言撤回するまで絞めますよ?」

そういつてウエレストをたこ殴りにするエミさん。どっから出したのか片手に縄を持つユキ。牢屋越しにアースは殺気だつててリクリアは片手にメスを持って構えている。

「……ユウトー!! 助けてくれー!!!!!!」

漫画みたいな砂埃を上げて見えなくなった陛下は多分エミさんにボッコボコにされてるのだろう。

「…………意外と腹黒体質だな…お前」

「というより、黒すぎでしょう…」

「わっユウ君強いね！！陛下まであーなっちゃうなんて！」

三人がビクビクしているのに一人だけ元気でニッコニッコしているリクリアが物凄い可愛い。

遠くからアーティが牢屋から顔を覗かせてるのも見えてクスリッと笑みを落とす。

「そういえば、何でお前陛下にあんな態度が取れるんだ？」

あれ？アースには言っ てなかったかな？というよりエミさん以外には教えてなかったよう で興味深々という顔をしている。

「第一に僕が陛下の親友だから。第二に、僕が王族だからかな」

またしてもフリーズ。いや、王族だったてようは親戚だよ？まあその辺の一般兵には知られたくないなって思ったから母親の旧姓を使ってるんだよね。

「おおおお、王族？」

「うん。僕の父親がウエレストの父親の弟なんだ。そんで平凡な母親に一目ぼれで結婚したらしくて城中大騒ぎ。あ、僕の本名は ユウト・レイズ・ウエスカーテル」

「…わ、陛下と同じじゃない？」

「うん」

「…そんな人が、牢屋の見張りでいいんですか…？」

ユキがおそろおそろ聞いてきた。うーん。そういう反応嫌いなんだけどな。

「此処の見張り面白いし父さんから言われたけど此処の仕事止める気はないから」

「…………良かったです。」

遠くからポツリッという声が聞こえてみれば鉄格子を握り締めてるアーティ。

…うーん、とりあえずアーティはリクリアの隣に移動させておこう。
アーティの出番がなくなる。

「ま、安心してね。まだエミさんとコントしたいしユキに大笑いさせてみたいしアースをリクリアと弄りたいしアーティを可愛がりたいから。」

「ワンブレスで言ったな……………」

ポツリツとエミさんが呟いた。

あ、そうそう。

その日賊が侵入し、その賊を恐れ多くも陛下が一人で蹴散らし大怪我で帰ってきたという噂が立ってるが……

賊なんて侵入してないしその怪我は全部 エミさんのせいですからね。伯父様

僕と休み。 前編

休暇だ。ここ二ヶ月ぶりの休暇だ。

別に僕の仕事は其処まで忙しくはないが何せ人数が人数だ。そうそう休めない。

と、久しぶりに取った休暇で僕は久しぶりの街に出てみた。この街で有名な闘技場へと足を運ぶと相変わらず騒がしくて僕はひよこんとその闘技場の試合を見た。

其処に立っている一人の青年。金色の短い髪の青年は二カツと笑って目の前の相手を倒していく。

「ふーん。……今日の遊び相手にしよう」

そうそう。僕はよく、性格悪いと言われるよ。

青年が闘技場を出たのを見て僕も後ろから着いていく。五百メートル程歩いた青年は僕が青年の後ろをずっと歩いていることに気づき不審に思ったのか振り向いた。

「…なんだお前」

「僕？僕はユウト。」

「そついうことじゃねえよ！」

「じゃ、どういうこと？二十文字以上三十文字で言える？何だお前つて言われたから答えたただだよ？」

「……ハアッ」

「あ、扱いずれえ野郎だな。この屑がつて思ったな」

「何で分かるんだテメエッ！！！！」

あ、ちよつと遊びすぎたかも。うん。というより街中でどつどつと剣を抜く目の前の青年に僕は目をキラッと光らせた。

「よし。君を逮捕する」

「はあっ!？」

「実は僕お城関係者」

「んなわけねえだろうが!てめえみたいなちっこい奴がなれるなら苦勞しねえよ呆け!」

あ、ちよつとカチーンときた。ちっこい言っ!確かにその……

…普通の14歳平均に10cm以上足りてないけど……

「ん、ちよつとムカついたから……僕も銃刀法違反しよう。」

まあコイツを捕まえるためなら別に駄目ともななんとでも言われそうだしね。と僕も短剣を抜いた。

ファイト!

見たいな?

「うぜえ奴は一発殺るに限るっ!」

「うわ、随分と物騒だね」

そういいながら相手の後ろに回ると見切られていたのかその長剣が思い切り頭上を通っていった。あ、髪が二三本落ちた……、まあいいか。これぐらいで禿にはならないし。と僕はその短剣を下から青年の首下に持っていた。

「はい。僕の勝ち」

「なっ……」

「知ってる?長剣の方がパワーはあるけど短剣の方が素早いから大きな攻撃がきたら隙ぐらいつけるよ?」

「……………」

その言葉に黙ってしまった青年。

僕はますますニヤニヤした。

「さ、て、と。青年。名前は?」

「…………レキ」

「よし。レキ!さあ今すぐ牢屋逝きか…僕と来るか、選べ!」

「両方同じだと思っんだがっ!？」

「僕ときたら牢屋に逝くのではなく牢屋見張り番になってもらっ!」
「両方嫌だ!」

「じゃ、死ぬ？」

「わわわわ、悪いっ！！分かったっ分かったよ！！」

滅茶苦茶やつれたように言うレキ。

僕は短剣をしまって、レキの言葉を待った。

「お前と一緒にに行けばいいんだろうがあああああっっ！」

滅茶苦茶やけくそに言い切ったレキは疲れたように座り込んだ。

普通の休暇で、なんと

従業員一人ゲット！！

それはまだ午前中の話だったりする。

僕と休み。

前編（後書き）

後半に続く

僕と休み。 後編

僕はレキを連れて（逃げたら犯罪者扱いだよ？って言って脅してるよ）買い物をする。

主に武器を中心に この街は一応この国の首都だから武器屋なんて五つぐらいあって争ってるんだよ。 見始める。レキも興味津々という顔をしていた。

それから色々見始めて一時間後……

やっとレキがないことに気付きました。逃げた？いや、あれは違うな。……迷ったんだっ！！誰が？僕が、レキが？うん。レキが。きつとレキ。ずつとレキ。絶対にレキ。多分レキ。よし、決定。……って事で探しにいつてやるか…と僕は振り向き歩き出す。

大きな欠伸をしながら歩き出すと見覚えのある金色の髪が見えた。あれは……レキかあああっ！！と僕はダッシュしてその金色の髪の肩を叩いた。

「はい？」

思ったより高い声。何処かレキに似ているけどレキじゃない…少女は僕を見て首を傾げてきた。

「あれ？レキじゃないや。御免なんでも……」

「兄さんを知ってるんですか？？」

首を傾げる少女……って兄さん？

「レキの妹？」

「はい。ロキといいます。貴方は……？お城の関係者のようにも見えますが……」

そう言つて金色の長い髪を揺らして聞く少女…ロキ。ロキかあ……うん。可愛い。

「僕はユウト。よろしくね。ロキ」

「はい。」

ふんわりと微笑むロキ。僕も思わず微笑む。

のほほんとした空気が漂う中、それを破る者が居た。

「おらおら、んなところで立ってちゃ邪魔なんだよああ」?

そう言っただけでくる所謂チンピラ。頬に十字傷を作った大男は僕とロキを交互に見てはつと笑い飛ばした。

「その穢ちゃん置いてくつていうなら許してやろうじゃねえからお坊主」

「坊主じゃないから無理だね。行こうロキ。」

「え?でも……」

そう言っただけで恐ろしい者を見るようにいうロキ。その手を引けば僕の横にズシンツと斧が落ちてきた。…斧使いか。

大男はへへんつと笑う。…僕の倍はありそうな身長が物凄いムカツク。

危ないからとロキを下がらせれば鼻で笑う大男。

「チビの癖にナイト気取りか?はっ、上等じゃねえか。餓鬼は餓鬼らしく餓鬼の家で母ちゃんの乳でも吸つてろ」

そう言っただけで斧を構える大男。

……僕の嫌いな言葉をそう何度も使いやがって……コイツ。

「ゴロツキはゴロツキらしく闘技場で殺されてきたらどう?」

「ユツユウトさんっ!」

その言葉に驚くロキ。僕に任せときなっ?って微笑を見せれば少しホッとしたようなロキ。

「はっ、餓鬼の癖によく言うじゃねえか。」

「へえ。チビとか餓鬼とか言ってくれるじゃない?なら僕に勝つてから言っただけどう?」

そう言っただけで背中の大剣を抜いた。ふっふっふ。僕は腰に短剣と長剣。背に大剣を持ってるんだ。……良くウエレストから剣マニアって言われるさ。

「そんな玩具でどうする気……だ……?」

目の前には僕に切り捨てられた斧。大きな斧の刃はドスンツとロキ

から1m離れた場所に落ちている。

「ウエレストと僕のお気に入り隣の隣国の武器屋の大剣さ。斬り味抜群だろ？」

そついうと大男の後ろに居た仲間らしき奴が僕を指差した。……空気が薄いね。アンタ。

「ああああ、アイツははは、……っ最強の牢獄番ですよっ！」
「牢獄番？」

聞いたことないらしい。というか僕も初耳だ。

「ユウトって呼ばれてたでしょうアニキ！アイツはただの牢獄番に見せかけた殺人鬼っスよっ！」

「おいこら待て」

思わず突っ込みを入れる。僕人を弄るのは好きだけど殺したことは一回もないよ？

まあ良いや。

「はい。全員牢屋B逝き」

何でBかって？こんなののは相手は僕が御免だからさ。

「…強いんですね。ユウトさん」

「うん。見直した？ロキ」

「……はいっ！！」

「ユウトオオオッ！！何処に居た…ってロキっ!？」

何処にいたのか走ってきたレキはロキを見て物凄く驚いている。そりゃそうだね。妹がこんなところにいるんだもん。

「大丈夫だったかっ!？さっきこの辺でチンピラが捕まったって聞いたが……」

「大丈夫です。ユウトさんが助けてくれました。…強いですよユウトさん。兄さんもボロ負けだったのでしょうか？」

「何で知って…っ」

「僕が教えたから」

「お前かあああつああつ！！！！？」

そんな馬鹿騒ぎをして僕の休日が終わった。

何かあんまり休んだって気がしないな……あのチンピラのせいで。

兎に角、今日はチンピラを捕まえ……レキという従業員を手に入れ口キという可愛い子とお知り合いになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3636e/>

牢屋と僕。

2010年11月12日20時36分発行